

保育環境に対する保育者と学生の認識についての一考察

小山 祥子

(北陸学院短期大学)

1. はじめに

平成元年の幼稚園教育要領の改定以来、幼児教育の現場では、「環境を通して行う教育」に重きがおかれるようになってきた。しかし、種々の保育環境について保育者がどのような認識をもっているのかについてはこれまであまり研究対象となっていなかった。

そこで本研究では、現場の保育者と保育学科の学生が持っている保育環境に対する認識に注目し、人的環境と物的環境の側面から、認識の相違を明らかにしてみたい。その上で、学生の環境への認識の傾向を確認し、保育者養成の中で「環境を通して行う教育」をどのような視点から育成するかを検討することを目的とする。

2. 研究方法

調査対象は、S市の幼稚園教諭(3・4・5歳児担当)59名および、保育者養成校で学ぶ1年次学生110名と、2年次学生108名である。学生はH短期大学の実習経験のない保育学科1年生と実習経験のある保育学科2年生である。

調査内容は、次の3点である。

1) 保育者がもつ人的環境と物的環境の優先度を知るための質問として、「保育環境(保育室・園庭・友だち・保育者)の中で大切だと思う環境を順位づけるとどうなりますか?」

2) 子どもの発達に影響を及ぼす物的環境が何であるか、教材・教具を取り上げ、「次にあげる教材・教具は保育に必要ですか?(ワークブック・絵本・玩具・固定遊具・絵画製作に使う材料・歌や音楽のテープ・パソコン・テレビ/ビデオについて、それぞれ、いる・いない・どちらでもいい、から三者択一)」

3) 教材・教具の中で一番必要とするものが何であるか、「前問の中で、保育に欠かせないものを一つだけあげると何ですか?」

3. 結果

1) 保育環境(保育室・園庭・友だち・保育者)の中で大切だと思う環境を順位づけるとどうなりますか?

幼稚園教諭の回答結果は、<1位:保育者・2位:友だち・3位:保育室・4位:園庭>、保育学科2年

生は<1位:保育者・2位:友だち・3位:保育室・4位:園庭>、1年生は<1位:友だち・2位:保育者・3位:保育室・4位:園庭>の順であった。これら結果の回答数を点数化(1位:4点、2位:3点、3位:2点、4位:1点)したものが、表1であり、幼稚園教諭はどの環境も点数が近似しているが、学生は保育者や友だちが高得点で、1位と4位では2倍近く値に開きがあった。

(表1)

S市幼稚園教諭 (回答数: 59)		H校2年生 (回答数: 108)		H校1年生 (回答数: 110)	
1位	保育者: 193点	1位	保育者: 350点	1位	友だち: 382点
2位	友だち: 192点	2位	友だち: 250点	2位	保育者: 328点
3位	保育室: 187点	3位	保育室: 206点	3位	保育室: 197点
4位	園庭: 195点	4位	園庭: 154点	3位	園庭: 193点

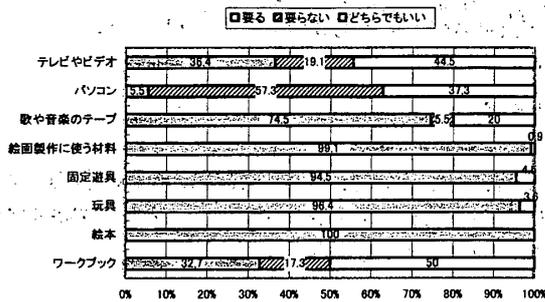
2) 「次にあげる教材・教具は保育に必要ですか?」(ワークブック・絵本・玩具・固定遊具・絵画製作に使う材料・歌や音楽のテープ・パソコン・テレビ/ビデオ)



(図1) 幼稚園教諭の回答 (N=59)



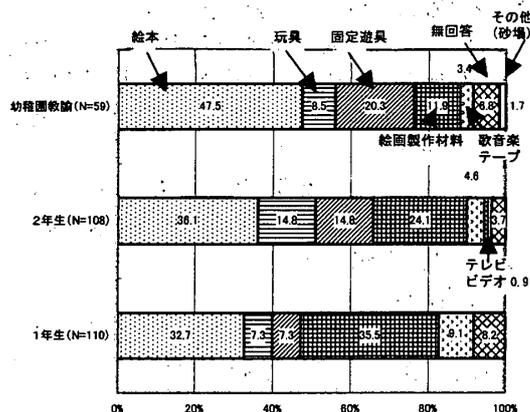
(図2) 保育学科2年生の回答 (N=108)



(図3) 保育学科1年生の回答 (N=110)

絵本・玩具・固定遊具・絵画製作材料・歌音楽テープは、三者とも9割近くが保育に必要と答え、テレビ・ビデオ・パソコン・ワークブックは意見が分かれていた。特に、文字や数字を教えるワークブックは、幼稚園教諭の半数以上が「要らない」と答え、学生の半数以上が「要る」か「どちらでもよい」と答えている。

3) 「前問の中で、保育に欠かせないものを一つだけあげると何ですか？」



(図4)

幼稚園教諭は、1位：絵本(47.5%)、2位：固定遊具(20.3%)、3位：絵画製作材料(11.9%)で、ワークブック・パソコン・テレビ/ビデオは0回答であった。

2年生は、1位：絵本(36.1%)、2位：絵画製作材料(24.1%)、3位：玩具と固定遊具(14.8%)。

1年生は、1位：絵画製作材料(35.5%)、2位：絵本(32.7%)、3位：歌・音楽テープ(9.1%)の順であった。

4. 考察

これらの結果から、保育環境に対する認識は、現場の保育者と養成段階にある学生の認識に一部相違があることがわかった。1)の結果からは、幼稚園教諭と学生1・2年生ともに、保育者や友だちなど人的環境をより

大切に考えていることは共通していた。しかし、大切だと思ふ順位を点数化してみると、幼稚園教諭は保育の環境として、人的環境も物的環境も同位に重要と考えているのに対し、学生は人的環境をより優位に考えている。このことは、幼稚園教諭は、保育者として自分自身の存在が子どもに重要な環境となると考える一方で、子どもが主体的にかかわる保育は、物的環境を構成することも同時に重要であると認識していると考えられる。一方、学生は環境の一部としての保育者の大切さはわかっているが、物的な環境構成の意義がまだ理解できていないのではないと思われる。実際、実習経験のない1年生は、保育室の数値が低く、実習を経験した2年生は、保育室の数値が上がるのと平行して、保育室の数値が上がっている結果からも明らかである。

さらに、保育の物的環境を教具・教材からみた場合、幼稚園教諭、学生1・2年生が必要と考えるものは共通しており、特に数値が高かったのは絵本であった。この結果は、絵本は子どもにとって必要不可欠のもので、環境構成の必須アイテムと考えていると受け止められる。つまり、子どもの発達に絵本の影響は大きいという認識が三者とも共通しているといえる。ワークブックについては、幼稚園教諭と学生の認識に違いが見られた。ワークブックが文字や数字を教えるための直接的な物的環境であることを考えると、現場の保育者より学生の「要る」という値が高い理由として、まだ保育経験が浅いために子どもが環境から学ぶというよりも、直接的な教材に頼ろうとする認識の表れではないかと考えられる。

以上のことから、保育者養成の場で学生に「環境を通して行う教育」の意義を伝える際、人的環境を学ぶと同時に物的環境、つまり物による環境構成の意義を具体的に伝えることも必要ではないかと考えられる。併せて、保育現場で使われている教材・教具を子どもの発達にどう関わらせていくのかについても、場面を通して学ぶ必要がある。

5. おわりに

この研究では、保育者と学生の保育環境への認識に着目してその相違を明らかにした。保育の中の具体的な人的環境と物的環境の認識の相違を見出したことは、保育者養成の中で「環境を通して行う教育」を考える際の有効な視点となると思われる。しかし、相違点は明らかになっても今回はその一側面を見たに過ぎず、なぜそのように考えているのかの理由や他の環境要因についての検討は、今後の課題としていきたい。